

竜の子 奨学生

TATSUNOKO NEWSLETTER

第7号

Mar 2011

その夢は、きっと世界を変えていく。



第14回交流会 新極真会にて



第13回交流会 ユニバーサル・スタジオ・ジャパン®にて



Contents

- P.2** 一語一会「国際人」
- P.3** 平成22年度活動報告
- P.4** 第13回交流会レポート
(大阪研修旅行)
- P.6** 第14回交流会レポート
(空手体験)

- P.8** 竜の子OB紹介
- P.9** 竜の子近況報告
- P.14** SPECIAL REPORT—名古屋特集—
- P.15** 寄付者の紹介
- P.16** 編集後記・Topics

「国際人」

近年、教育の目標として国際人の養成を掲げている大学が数多くあります。私が勤めていた東京外国語大学でも大学のホームページで学長が「学部・大学院をとおし、……中略……真の国際人の育成を目指す」と述べています。

皆さんは「国際人」という言葉を聞いた時、どのような人をイメージしますか。「国際的な場で活躍している人」、「一つの国だけでなくいくつもの国で有名な人」、「国際的な仕事ができる人」などでしょうか。世界が相対的に小さくなり、国際的な場で仕事をする機会が劇的に増え、またこれからも増えていくことが確実な現在、「国際人」を育成することは教育機関にとって必要不可欠なことと考えられ、大学の大きな目標になっているのでしょう。

では、どうすれば「国際人」は生まれるのでしょうか。まず、だれでも条件としてあげることが母語以外の言語に堪能なことです。特に現在、国際的共通語になっている英語ができることは必須条件のように考えられています。それは英語を母語とする人とだけでなく、他の言語、例えばタイ語やロシア語の母語話者とでも英語でならコミュニケーションができるからです。でも語学力だけでは「国際人」して十分ではありません。

コミュニケーションにおいて、言葉は単なる手段です。言葉を使ってどんなコミュニケーションをするのか、何を達成するのか重要になってきます。国際的な場では、言語の違いよりもむしろ文化、社会の違いにより、相手に自分の立場を理解させたり、反対に相手の立場を理解したりすることが難しくなります。自分が相手に何を求め、相手は自分に何を求めているのか、どこまでなら譲歩でき、どこからは譲れないのか、これらを見極めることが重要ですが、それには相手を知ると同時に、自分を客観的に見つめることも必要です。そして、相手にも自分にも誠実に向き合うことが一番大事だと思います。

このようなコミュニケーションを会得するためには、異なった文化、立場の人と積極的に交わっていく姿勢が重要です。竜の子奨学生の皆さんは、交流会などの場においても日本人学生には見られないほど積極的に日本人の参加者に話しかけ、交流をもっています。誠実に人と付き合い、人間性を豊かにしようとする姿勢をもった皆さんは、世界の中で活躍できる真の「国際人」に育っていくことと大いに期待しています。

選考委員 よこた あつこ 横田 淳子

豪、米、日本の大学で日本語を教えた後、
東京外国語大学留学生日本語教育センター教授。
2001年～2007年同センター長。現在、同名誉教授。



「一語一会について」

竜の子奨学生にとって、財団関係者からの励ましの言葉は、大変貴重なものです。そして、竜の子奨学生には、その言葉は一生に一度の出会いであると心得て、そこから多くのことを学んでほしいという願いを込めて、このコーナーを「一語一会」と名付けました。

平成22年度活動報告

●6月2日

第9回理事会、第8回評議委員会を開催
(1) 平成21年度事業報告及び収支決算について
(2) 定款の変更の案について
(3) 内部諸規定(案)について

●7月3日～4日

第13回交流会(大阪研修旅行)
第1日目 なんばグランド花月にて吉本芸人の
生ライブを鑑賞及び道頓堀周辺散策
第2日目 ユニバーサル・スタジオ・ジャパン
訪問



●9月22日

第10回理事会、第9回評議委員会を開催
(1) 基本財産の処分について

●12月4日

第14回交流会(空手体験)
空手体験、懇親会



●2月28日

第5回奨学生選考委員会を開催
新たに5カ国13名の竜の子奨学生が決定しました



第13回交流会レポート

平成22年7月3～4日、竜の子奨学生の第13回交流会—大阪研修旅行が開催されました。28名の奨学生と14名の財団関係者及び寄付者の皆様で関西地方の代表吉本新喜劇を見学したり、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）を体験いたしました。

朝8：30、新幹線東京駅八重洲口から一泊二日の大阪研修旅行がスタートしました。コミュニケーションを取りながら、より自由を楽しむために、6つのグループに分かれて、行動することになりました。12時に新大阪に着きました。昼食が終わってから、大阪の名所道頓堀周辺を散策しました。寄付者の加藤照美様のご好意で、名物のたこ焼き等をおいしく頂きました！ ありがとうございます。その後、なんばグランド花月に移動して、吉本新喜劇を見学しました。



おいしいたこ焼きを頂きました（熱い！）

漫才は日本古来の万歳（マンザイ）を元に日本の関西地方で独自に発達したと言われていています。私は今までに聞いたこともないし、研究室の日本人学生に聞いても、吉本新喜劇を見た人はいませんでした（関東人のせいかな）。この伝統文化の面白さは分かるかどうか心配していましたが、本番が始まって、思わず笑ってしまいました。外国人にとって、確かに分かりにくいところがありましたが、芸人達のユーモアな表情と滑稽な振る舞いで思わず笑い始めました。一番好きなのはやはり桂文珍先生の落語でした。日常生活の些細な話題ですが、余裕の表現の中で滑稽が出てきて、笑ってしまいました。さすが江戸時代から続く日本の伝統文化ですね。満席のグランド花月からも漫才の素晴らしさが分かりました。

吉本芸人の生ライブを見学した後、夜19時、「づぼらや」道頓堀別館で懇親会を行いました。おいしいふぐ料理を頂



なんばグランド花月での記念写真

きました。日本では古くからふぐ食が行われていましたが、内臓等に毒を持つため扱いが難しく、ふぐ料理は高級な料理として世界で知られています。私たちはふぐ鍋、ふぐの唐揚げ特に見た目にも楽しめるふぐ刺身「テッサ」を味わえて、とてもおいしかったです。そして、ビンゴゲームで会場が盛り上がりました。

翌日、空が気持ちよく晴れていました。朝ホテルで朝食を食べってから、早速バスで夢のユニバーサル・スタジオ・ジャパンへ移動しました。駐車場からパークへ移動中に楽しい音楽が聞こえてきて、気持ちもわくわくしてきまし



秋元理事長と一緒にジャンプ！

た。パークに着いたら真っ先にハリウッド・ドリーム・ザ・ライド（ジェットコースター）にダッシュ！ 青い夏空を眩しく走っているのを見て、怖そうだけど、乗りたいなあとドキドキしていました。入口の噴水のところで集合写真を撮り、9時から各班で自由見学を始めました。

私たちの班は奨学生4人と寄付者の久保玲士様、森建文様、合わせて6人でした。効率よくまわるために、みんなで役割を分担して、一番いいルートを探してくれました。女性の2人はおしゃれなアメリカの街並と憧れたハリウッド舞台を、写真をたくさん撮りながら散歩していたので、忙しかったですよね（笑）。

一番楽しかったのはやはりアトラクションでした。最初にスペース・ファンタジー・ザ・ライドで壮大な宇宙空間を旅行し、又、スパイダーマン™の不思議の世界がリアルに体験できました。更に、ハリウッドの特殊効果で表現したシュレック 4D アドベンチャー™を体験し、自分が舞台の一員のような臨場感を味わえました。

一番印象に残っているのはハリウッド・ドリーム・ザ・ライドです。乗る前に本当に迷いました。乗った人の絶叫を聞くと、ますます怖くなりましたが、乗りたい気持ちもありました。私の人生初のジェットコースターの冒険を始めました。

運がいいかどうかかわからないですが、一番前の席に座ってみたところ、本当に迫力満点でした！ はじめの急降下のところで、足が浮いて宇宙に投げられるようなすごい浮遊感を感じて、思わず叫びました。たまったストレスを大阪の空に投げ捨て、爽快でしたが、あまりに緊張しすぎて、周りの景色を見る余裕はなかったです。隣の崔さんは本当に怖さを知らずに手を振りながら乗っていました。



USJ内の昼食。久保さんはいつの間にか寝ました？

降りた後しばらく心がドキドキして興奮していました。普段学校と生活で精いっぱいになる私たち留学生に対して、なかなかできない貴重な思い出になりました。この場を借りて、ゴールドマンサックス証券のアンクルサフ様ならびにユニバーサル・スタジオ・ジャパンのガレン・ガンベル社長、寄付者の皆様にお礼を申し上げます。

3時半にユニバーサル・スタジオ・ジャパンの見学が終わりました。暑さと興奮で赤い顔のみなさんは帰り途につきました。とても楽しかった一泊二日の交流会でした。



ユニバーサル・スタジオ・ジャパン内でウッディー・ウッドペッカー™に会えました！



誰？（実は奨学生の劉知凡さん）

第14回交流会レポート

平成22年12月4日（土）、竜の子奨学生の第14回交流会が開催されました。多くの竜の子奨学生と財団の関係者、そして寄付者の皆様と日本伝統文化である空手道を体験しました。空手道を体験しながら、真の強さとは何かについて深く考えることができました。

朝11：30、総武線飯田橋駅西口から第14回交流会が開催されました。さっそく近所の店で昼食会が開かれ、おいしい食事と歓談を楽しむことができました。食事はイタリアンのコース料理がでてきて私にとって凄く豪華な食事でした。楽しい昼食会が終わり、いよいよ交流会の本題である空手道を体験するためにNPO法人 全世界空手道連盟 新極真会の総本部道場へと移動しました。総本部道場に着くと、新極真会の関係者の皆様がお出迎えをしてくださいます。さらに道場に入ると奨学生の私たちよりも先に財団の関係者の方々が到着されていました。その中で、白い道着を着てらっしゃる秋元理事長を発見したときは驚きを隠せませんでした。その後、新極真会の紹介映像を鑑賞するところから、本格的に第14回交流会が始まりました。

緑健児代表は、空手バカ一代にあこがれ、極真の道に入り、「死力達成」の大山総裁の意思を受け継いだ空手家です。現役時代に小さな巨人と呼ばれ、第5回全世界大会のチャンピオンの座まで上り詰めたため、希代の天才とも呼ばれました。そして、新極真会は世界最強の夢を実現させた緑代表が現役引退を表明し、極真のさらなる繁栄と世界最強の人材育成という次なる夢へ挑むため、2003年7月11日に「NPO法人 全世界空手道連盟 新極真会」という名称で立ち上げた団体です。現在、新極真会は全世界77カ国、7万人が所属する団体へと成長しました。

新極真会の映像が終わると緑代表から挨拶の言葉をいただきましたが、その中でも最も記憶に残っている言葉は「空手の精神」です。空手の精神というのは、強くなればなるほど人にやさしくするというので、今の時代にすべての人間が持つべき精神ではないかと思いました。現在、世界中では戦争や紛争が後を絶たずに起きており、国内でも様々な陰悪な事件などがよく報じ

られています。このようなことは、強い人が弱い人に対する優しさを持っていないために起きていると思ったからです。いよいよ本格的な空手の稽古が始まりました。空手の初心者である私たち奨学生に対し、緑代表と新極真会の皆様は一人からやさしく指導してくださいました。まずは、空手の返事である「押忍」についてから始まりました。「押忍」というのは、嫌なことやつらいことなどを、喜びをもってやりとげることの意味だそうです。稽古はいつもつらいことですが、つらいとっていやいやと稽古をすると実力は伸びない。つらい稽古も喜んで、自らチャレンジしていくという意味だそうです。最初は、押忍という返事に慣れていないせい「はい」と返事する奨学生もいました。次は準備体操でしたが、意外とハードな準備体操で自分の体の柔軟性の無さに驚きました。そのあと、基本稽古が始まりました。基本稽古の八割方である三戦立ちを学び、何回も繰り返し練習しました。そして、稽古は「突き」と移っていき、奨学生たちの空手に対する熱気はだんだん熱くなりました。その熱気と共に、奨学



柔軟体操



正拳の練習



緑代表

生たちは、緑代表の合図のもと「せいや！」と力が入った気合を入れながら拳を突きました。その次は裏拳打ちを行い、正面・両サイド・正拳顎打ちとポジションを変えながら打ちました。次に深呼吸、腹式呼吸について学びました。腹式呼吸は、息を吸って腹の方に意識的に持っていくように注意しながら呼吸する方法です。腹式呼吸は胸式呼吸よりも早いスタミナの回復の効果があるようです。その次に騎馬立ちを学び、蹴りと移りました。その中で緑代表から頂いた「苦しいときほど、強くなる」という言葉には非常に感銘を受け、次の稽古も頑張ることができました。その後の前蹴り50回、回し蹴り50回は苦しいというより楽しかったです。まさにこの感情が「押忍」そのものではないかと思いました。そして、回し蹴りを最後に基本稽古は終了しましたが、続きとして新極真会の皆様による応用稽古が始まりました。まずは、様々な応用稽古や移動稽古、組み手などの様々な稽古を新極真会の方の見本を拝見し、できる範囲で実践し学んでいく方法で行われました。その後にビッグミットを用いて蹴りの稽古を行いました。そして、蹴りの防ぎ方についても学び、二人一組として練習を行いました。素人だったので特に難しい稽古だと思いました。そのとき2010年度の全日本空手選手権の優勝者である塚本選手が突然道場にあらわれ、世界レベルの実

力を見せてくれました。塚本選手がビッグミットに当たる時の音の大きさは「さすが、これが日本チャンピオン」と思い浮かばせるような大きな音で驚きました。

すべての稽古が終わり、今回の空手体験の中一番のハイライトであった秋元理事長による試割りが行われました。緊張している姿の秋元理事長を、私たち奨学生や、その場にいた皆様は息を殺して成功を祈り見守りました。その思いが伝わったのか、秋元理事長は無事に試割りを成功させました。秋元理事長のこのような男らしい一面は初めて目にしたので、今でも凄く印象に残っています。

良い汗を流し、本当に楽しかった空手体験がすべて終わり、緑代表からは素敵なプレゼントをいただきました。思いもしなかった新極真会の本やパンフレット、Tシャツをいただき、奨学生の皆は大喜びしました。そのTシャツは新極真会での空手体験が形として残っているような気がして、もっとも嬉しく思いました。余談ではありますが、普段着としてかなり愛用している奨学生もいるとの噂です(笑)。

この場を借りてもう一度感謝の言葉を申し上げたいです。「緑代表、そして、新極真会の皆様。ありがとうございます。本当に良い経験になりました。」



いよいよミット打ちにチャレンジ!



秋元理事長がバット折りを披露



全日本王者 塚本選手のミット蹴り



新極真会のパンフレットをいただく

(担当：平成21年度竜の子奨学生 慶応義塾大学3年 李 昌昱)

竜の子OB紹介

平成22年12月4日（土）、秋元国際奨学財団にとって初めてのOB会が開かれました。卒業生の15人が参加した今回のOB会にはぎやかな雰囲気の中で行われました。OBの方々の近況も知り、たくさん話もでき楽しいひとときをすごしました。

新極真会の総本部道場での空手体験が終わった後、財団の関係者、竜の子奨学生たちは懇親会兼OB会の会場である「別亭 烏茶屋」へと移動しました。あとで知ったことではありますが、「別亭 烏茶屋」はフジテレビのドラマ「拝啓、父上様」のロケ地としても有名なお店であり、いつも多くのお客でにぎわうお店でありました。



素敵な笑顔の塚本チャンピオン

17時30分から始まった懇親会には約70人といった大勢の人々が集まりました。懇親会の会場には、空手新極真会の緑代表や塚本日本チャンピオンを始め、鎌倉でお世話になった円覚寺教学部長の朝比奈様、裏千家の桑原様、財団の関係者の方々、そして、竜の子奨学生の現役生と卒業生、様々な国からの、様々な職業を持つ人々

が集まり、懇親会を楽しみました。「別亭 烏茶屋」での食事は言うまでもなく、美味しいものでした。しかし、その美味しい料理以上に今回の懇親会が楽しくなった理由は、やはり、懐かしい顔がたくさん見られたからではないかと思えます。可愛い女の子の赤ちゃんが生まれ、ずっと嬉しい顔をしていた東京大学卒業の宋さん、同じく東京外国語大学に在学していながら、なかなか会うことの出来なかった余さん、エルビス・プレスリーそっくりで皆の話

題になっていた東京電気大学卒業のイーダヤットさんなど、OBの皆、学校や財団を卒業してから、どのような生活をしているのか、顔をあわせ話ができてとても嬉しかったです。

今回の懇親会ではもう一つ秋元国際奨学財団にとって「初めて」のものが生まれました。それは、東京芸術大学の班文林さん作曲の竜の子奨学生の歌であります。「その夢はきっと世界をかえていく」というその曲名と歌詞の内容はまさに、竜の子奨学生の皆様にふさわしいものでした。そして、この様な素敵な奨学生の歌を持っているのは多分、竜の子奨学生だけだと思います。班さんが作ってくれた竜の子奨学生の歌が、秋元国際奨学財団と共にずっと続けばいいと思います。

「その夢はきっと世界をかえていく」

作詞：竜の子奨学生

作曲：班 文林（ハン・ブンリン）

夢 希望を叶える為に 僕たちは生きている
その夢はきっと世界をかえていく 平和のために
いろんな事があるけれども どんなときにでも
仲間とともに乗り越えて 竜の子の誇りを胸に
夢 希望をかなえる為に みんなは生きている
その夢はきっと世界をかえていく かならず



名物うどんすきに奨学生も大満足

だんだん発展していく秋元国際奨学財団ではありますが、それは卒業したOBの方々も同じです。皆、財団や学校を卒業し、自分の専攻分野を生かし、就職したり、研究を続けていたり、皆夢に向かって一歩一歩進んでいます。その様なOBの目に映る現役の竜の子奨学生たちは、ある意味かわいい存在であり、自分の過去であるように感じるかも知れません。そこで頑張っている現役の竜の子奨学生を見た卒業生の方から以下の素敵なメッセージをいただいたので、ぜひ紹介したいと思います。

ソウ チャンソウ
宋 昌錫—東京大学卒業

私が奨学生として秋元国際奨学財団にいた期間は1年間ですが、大学院の博士課程を修了する事となり、すぐ奨学生からも卒業をすることになりました。卒業後は契約社員として木造建築を専門とするコンサル会社で建築コンサルタントとして働いています。そして、在籍していた東京大学で研究員として所属する事になり、博士課程の時にやりきれなかった研究や作品活動を続けています。その結果として、2010年6月に約2週間、東京青山にあるギャラリーで木材を用いて私がデザイン・製作をしたオブジェを展示することができました。またその直後はイタリアで開かれた国際会議で今まで研究した成果を発表し、非常によい評価をもらうことも出来ました。しかし、現在の仮の仕事ではない、本当にやりたい仕事を見つけるため、二つの仕事を両立させながら就活もしています。自分が100%満足できる専門性を持つ仕事を探すことは難しいです。私の場合は博士課程の修了を最優先にしていたため、在学中は研究に追われ、あまり就活をしていませんでした。しかし、これは大きな過ちだったと私は思っています。奨学生の皆様、とくに博士課程の方は仕事をみつけてから学位を貰いましょう！



も10月から発表され、現在もキャンペーンのために準備を進めています。

一年以上にわたった就活の中で、とくに印象に残っていたのは、業界を細かく絞込まないで、たくさんの企業に自分をアピールすることと、エントリーシートを就職アドバイザーに見せて意見を伺うことです。就職活動を早め始め、時間とチャンスを無駄にしないことも重要です。最低限100社にエントリーし、70社の一次面接に合格、40社の二次面接に合格、20社の最終面接を受けるような目標を持って、一所懸命頑張っていかなければ、現在の厳しい状況で自分のやりたい仕事を見つけることは難しいと思います。

就職活動中の後輩にこう言いたいです：結果は努力次第です。夢に向かって頑張ってください。

カク テンテン
郭 甜甜—東京海洋大学卒業

(現在：東京医科歯科大学大学院)

昨年大学院に入ってから、9月末に大阪で開催された「第69回 日本癌学会学術総会」で私の修士論文である「家族性乳癌原因遺伝子BRCA2の中心体制御および細胞周期チェックポイントとしての機能解析」の一部「Aktキナーゼによるリン酸化BRCA2と14-3-3 γ との結合」というテーマの内容を発表しました。



それから学会後、就職活動シーズンに入り、世の中を知るため、そして自分自身を見直す機会を作るため、就職活動を始めました。様々な業界を研究し、社会人の先輩を訪問することによって、ずっと理系で研究室に潜り込んでいた私もビジネスやマーケットについて少し理解が深まりました。これまで自分が思っていた会社のイメージと、かなり異なるものも多々ありました。就職活動そのものが日々勉強だと考えています。

今、進学や就職を考えている竜の子奨学生に一言メッセージを申し上げますと、何でも自分の思い込みで物事を進めるのは絶対に避けてほしいということです。少し時間をかけ、自分が関心をもつ分野（業界）以外の世界にも目を向けてみてください。必ず時間の無駄ではなく、今後の自分自身に対する実りある経験であるに違いありません。一緒に頑張りましょう。

イーダヤット ザイダン—東京電気大学卒業

初めてのOB会はとてもよかったです。長い間お会いできなかった財団の皆様と奨学生たちの元気な姿を見て、元気とエネルギーを貰いました。嬉しく思っています。たくさんの方々と色々お話ができて楽しかったです。



私は、2010年の3月に東京電気大学で博士課程を終え、工学博士号を取得できました。4月から株式会社イチベルというベンチャー企業で音声自動翻訳ソフトの開発に携わっています。最初から今までの毎日はとても忙しく、大変な時期も結構ありましたが、自分の好きな仕事ですので、一所懸命頑張っています。私が担当している製品

竜の子近況報告



先輩と同級生の3人(本人中央)。プロモ山でご来光を見た時の写真です

平成21年度竜の子奨学生

アンドリー・セティアワン
(インドネシア・ジャワティムール州)

群馬大学大学院

「帰国と就職」

夏休みの帰国と受験した資格試験について、報告させていただきます。

昨年の8月に就職前の最後の帰国をしました。今回は2人の先輩を連れて、インドネシア旅行を1週間ほどしました。ジョグジャカルタにある王宮、遺跡や寺院をまわり、インドネシア料理を食べたりし、中央ジャワ、東ジャワを観光しました。そのあとは実家に帰り、2年ぶりに家族(両親、妹と弟)に会うことができました。リフレッシュして、日本に戻ることができました。

それに加えて、今年の就職に向けていろいろ準備しています。そのうちの1つは資格試験です。4月からはシステムエンジニア職につきますが、その職の「免許」と言えるような試験が一つ存在しています。基本情報処理技術者試験です。去年10月の下旬受験をし、おかげさまで合格することができました。

「函館の新しい生活」

去年10月、札幌から水産学部の函館キャンパスへ移行してきて、5ヶ月ぐらい経ちました。今は五稜郭のすぐ近くにある北農寮で生活しています。札幌では水産学部の先輩との交わりがなくて、同級生で満足するしかなかったのですが、函館へ来てから特に寮の先輩達と絆ができてうれしいです。そして、新しい趣味ができました。それは、釣りです。自転車でも行ける距離に海があって、天気さえ良ければ、気軽に釣りをしに行きます。最近はカレイや、ソイ、ダナゴ、フグなどが釣れました。小さくてあまり食べるところがないので、離したりします。しかし、冬の時期、寒くて釣りは無理です。特に函館の海風が強くて、風が吹く日には町の中でもちょっと大変です。風さえ吹かなければ、函館は静かで綺麗な町なので、すぐどこかに遊びに行きたくなります。



はじめて釣れたカレイ。小さかったが、揚げ物で美味しく食べました

平成22年度竜の子奨学生

李 大英(韓国・ソウル市)

北海道大学

「学生時代の最後の冬休み」

皆さん、お元気ですか？ 現在私は帰国中で、忙しくて面白い日々を送っています。

去年内定をいただいた株式会社ローソンの10月1日の内定式を終えてすぐモンゴルに帰りました。日本に留学して以来、帰国がいつも短かったのですが、今回は入社までに5ヶ月もいる予定です。日本に慣れすぎたか、モンゴル人でいながら、モンゴルに帰ってカルチャーショックを受けました。例え、サービスなどをつい日本と比べてしまって、不満を感じる時にも少なくないです。それでも母国でしか味わえない料理やきれいな自然に、家族と友人に恵まれていて、帰国は楽しいです。

そして近況の中で最も大きなイベントは運転免許の取得でした。2ヶ月間、寝ているときの夢でも車のことでした^^。そして去年11月29日に無事に運転免許の試験にパスしました。前は車の運転に恐怖を感じていた私が、早く免許をもらって、運転したいと思うようになりました。やはり、何事でも、やってみないとわからないですね。

以上、私の近況報告ですが、日本に戻って、次の交流会で会う際にもっと色々お話できることを楽しみにしています！



ウランバートルにあるガンダンという仏教のお寺の前に

平成21年度竜の子奨学生

ガンバートル・エンフジャルガル
(モンゴル・ウランバートル市)

立命館アジア太平洋大学



新年の初詣、明治神宮

平成22年度竜の子奨学生

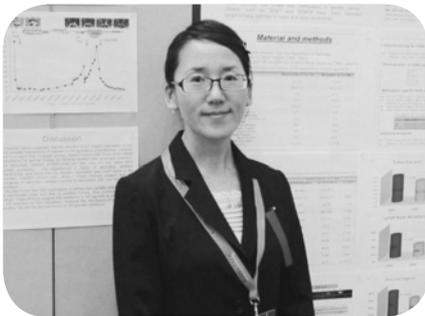
王 悦来 (中国・河北省)

東京工業大学

「卒業研究に励んでいる」

私は東京工業大学工学部開発システム工学科（機械コース）の4年生です。最近の一番うれしい出来事は大学院への進学が決まったことです。4月から東京工業大学のメカノマイクロ工学専攻に進学することが決まりました。現在、卒業できるように、私は毎日必死に頑張っています。

私は「些末電力の蓄積に関する研究」をやっています。今理論計算は終わって、実験装置を組み込んで、実験をやっているところです。最初の実験では、エネルギー効率が悪くて、全然蓄積できませんでした。先生と相談し、実験装置を改良した結果、だんだんうまく蓄積できるようになりました。これから卒業論文を書く為に、大量実験して、いい論文を出せるように頑張りたいと思います。



日本癌学会発表

平成21年度竜の子奨学生

孫 敏華 (中国・天津市)

東京大学

「私の充実した研究生生活」

2010年の4月から、私は博士課程の3年生になり、今は学位のためのデータを集めるために一生懸命実験をしているところです。私の研究テーマはEBウイルス関連胃癌に関するもので、その発ガン機構を分子レベルで解明することが私の研究目的です。今までの研究結果を去年の10月に大阪で行われた日本癌学会で発表することができました。

そして、日々忙しい研究生生活から、少しでも精神的に休みを取るために、私のお住まいである日中友好会館別館一後楽寮で、初めて、芸術団を創立しました。メンバーは40人で、主に日中友好会館で行われる中国の国慶節などの祝い会で、中国の伝統舞踊、楽器、歌などを演出する事を通じて、中国の伝統文化を日本人に紹介し、日中友好交流を進めることです。又、去年の12月に私が先頭して、東京大学の医学系研究科で在学中の中国人留学生を集めて、「東京大学中国人医学研究グループ」を組むことができました。これからも、いろいろ頑張っていきたいと思っています。



理事長からの活け花を囲んだ妻鄭巧、長女恵、次女意家族4人が喜ぶ様子

平成20年度竜の子奨学生

張 冲 (中国・浙江省)

立命館大学

「できる時は精一杯勉強すべきだ」

私はいつものように家族の生活を安定させ、勉強しながら仕事を頑張っていますが、去年の夏休み以降、生活の中心は勉強から仕事へ移りつつあるのが大きな変化です。悔しいのは思い通りに勉強できないことで、心を痛めています。だが、長女めぐみ(恵)は4月から小学生になり、入学前の勉強で忙しい毎日です、次女こころ(意)は1歳になりまして、立ちながら歩き出し、パパと呼んでくれます。家内は音楽の勉強で成果もだんだん出てきていることを見て、本当に幸せを感じています。もう一つは子守りの時間が多くなり、二女が家内より私に親しくしてくれて嬉しく感じます。

子供の成長を見守り、家内の音楽勉強を支えるために、今年は博士課程を休学し、就職するつもりです。しばらく社会人として働き、余裕が出たら、もう一度復学したいです。奨学生には、僕の経験から学生時代に精一杯勉強していただきたいと心より願います。これからはいろいろなことで思い通りにできないことが多くなるからです。



愛知県鳳来寺山にて（紅葉狩）

平成21年度竜の子奨学生

陳 悦 (中国・鎮江市)
名古屋大学

「内定をもらいました！」

2010年の一年間は私にとってまさに人生の交差点となりました。就職活動で半年の奮闘の結果、株式会社日本IBMに内定をもらい、コンサルタント職に採用されました！ 2011年の4月から東京勤務となり、コンサルタントとして企業の戦略策定と問題解決に力を尽くす仕事を楽しみにしています。多忙で、緊迫感が満ちた就職活動を通じて、日本社会の競争の激しさを身近に体験したと同時に、友達、家族、先生など、多くの人々に支えられる際の温もりも実感しました。とてもいい環境に恵まれた自分が本当に幸せです！

現在は学生の身分から社会人に切り替える時期となっていて、社会人になることを楽しみながらその責任の重さも感じています。学生時代と同じく、自分の知識と力を活かして、これからビジネスの世界でも日本と中国の架け橋になるように活躍したいです。



ワシントンにて

平成20年度竜の子奨学生

班 文林 (中国・内モンゴル)
東京芸術大学

「青い鳥」

去年の9月、ニューヨークへ作曲家たちのインタビューをしに行ってきました。ハードなスケジュールだったので、6日間の中ほとんど寝る時間がありませんでした。その代わりに充実感と満足感と視野の広がりが一番大いなるお土産でした。また、アメリカの作曲家たちからインスピレーションをもらって、1曲のコンテンポラリー・コンピュータ・ミュージックを、肩が動けなくなるほど、いくつの朝から晩までをかけて作りました。そして、パリのIna-GRMとMOTUSまた日本のACSM116が主催したCCMC2011コンサートにこの作品が選ばれ、2月27日に上演しました。他に論文も積極的に校外で発表を行っています。

いつも思いますが、どのスタイルの音楽の中でも芸術品があります。プロの作曲家では必要に応じて、音楽ジャンルに禁固されず、いい作品を構成できるように頑張るのです。つまり、作曲や演奏という分野は聴衆のために我を忘れ、集中して音楽だけ捧げる行為なのです。多分どの分野においてもいい成果が望むならそうするしかないでしょうね^_^

「学会の優秀発表賞を受賞しました」

2010年10月17日～21日に横浜で開催された国際学会 6th International Symposium on Organic Photochromism (ISOP2010) で優秀発表賞を受賞しました。「Synthesis and Reactivity of Mononuclear Iron and Ruthenium Complexes with Dithienylethene Ligand」という発表題目で、ジアリールエテン配位子を有する鉄およびルテニウム錯体のフォトクロミック挙動と特異な電気化学的挙動について発表しました。この学会では、ポスター58件中、優秀賞5件が選出され、そのうちの1人として選ばれて光栄です。中学校からずっと日本語を勉強して、英語を独習してきた私には認められて、本当に晴れ晴れしい日でした。



穂田先生と私

平成22年度竜の子奨学生

李 慧芳 (中国・遼寧省)
東京工業大学



最終審査

平成21年度竜の子奨学生

劉 栄 (中国・福建省)

日本大学

「楽しい研究生活」

子供を持っている私にとって、人より幸せさを感じているはずですが、その代わり、他人より倍以上の努力をしなければなりません。今研究論文や制作のため、中国にいる親に子供の面倒を見てもらっています。自分は建築デザインを勉強しているため、できるだけ肌で建築空間を体験したいです。去年の大阪交流会にみんなと別れた後一人で京都に泊まり、貴船で涼風を感じ、比叡山に登り、奈良の法隆寺、宇治の平等院、京都市内の様々な路地などの空間体験をしました。また、日本建築文化研修旅行で神戸女学院、関西学院大学、京都上賀茂神社社家町並、近江八幡市の町並、白川郷、金沢21世紀美術館、兼六園、建築家ヴォーリズの建築も数多く見てきました。時間を節約するため何日間もお昼も食わずに廻ってきました。建築空間を体験するだけでなく、能、歌舞伎、宮内庁の雅楽、全国の民俗芸能大会などの日本文化も見に行きました。これらの体験をもとにして、私の研究に生かし、やっと1月にある最終審査が無事終了しました。



夏の交流会
ユニバーサル・スタジオ・ジャパン前

平成19年度竜の子奨学生

劉 知凡 (中国・大連市)

東京大学

「免許取り」

社会人になるため、やっぱり免許は取っておいたほうが良いと思っていて、卒論を書く傍ら教習所に通い始めました。

中国で免許を取ったことがないので、分からないことだらけです。実際に車を運転してみると、全く思うままに動けなくて、怖かったです。初日はこのまま一生免許が取れないんじゃないかとさえ思いました。

時間が重なっていく内に段々コツを掴んで、運転の楽しさもすこしずつ分かって来ました。

教習所でしっかりと運転のノウハウを身につけて、優良ドライバーになりたいと思います。(その前にまずは車を買えるようにならないといけません)

「研究室が決まりました」

皆さん、ご無沙汰しております。お元気でお過ごしでしょうか。

大学3年の生活もあと僅かとなりました。今年は卒業論文を書くという大仕事が待っています。それに先立ち、学生の研究室配属が行われました。情報技術を学びたいというきっかけで情報工学科に入りましたが、情報技術と言っても、星の数ほど様々な技術があります。その中から、自分が学びたいものを一つ選ばなければなりません。最近、これについて結構悩んでいます。情報工学科には研究室が20近くもあり、配属先を決めるのが大変です。まず全体の説明会で全ての研究室についての説明を聞いた上で、特に興味を持った研究室公開に参加し、志望する研究室を決めます。私は「並列計算」を研究することになりました。「並列計算」とは、ネットワーク上のたくさんの計算機資源を同時に利用する技術のことを言います。これにより高速な計算が可能になります。高速計算の技術は様々な分野で用いられています。これからこの技術についてより深く学んでいきたいと思っています。



自宅の端末から大学のサーバへ接続

平成21年度竜の子奨学生

林 熙龍 (中国・福清市)

電気通信大学

SPECIAL REPORT 一名古屋特集—

● 中日新聞社でのインターンシップ ●

2007年の秋、私は憧れの名古屋大学から入学通知書を受け、日本での2度目の留学生生活を始めました。名古屋で暮らした3年間半の間、この町の独特の文化及び名大の学術雰囲気にも馴染み、充実した大学院生生活を送りました。

名古屋を中心とする愛知県は日本を代表する工業地帯の一つです。この地域に多くの工業都市が繋がっており、数多くの製造産業が集積しています。ここにある名古屋大学の特色は地域産業と経済に密着する産学官連携（産業、研究、政府機関三者による知識・技術研究の提携）です。

私が所属するメディアプロフェッショナルコースはこのように、名古屋地域の中日新聞、NHK名古屋などのマスコミ業界と大学のメディア研究分野を融合した産学官連携講座です。私は大学院で理論研究を行うと同時に、マスコミ現場での実務技能の習得という社会実践も体験しました。

メディア現場での実務研修の中で、一番印象深いのは中日新聞社でのインターンシップでした。10日間の間に、地方支局、社会部、写真部、整理部、広告局、新聞社の5つの部門でローテーションをして、新聞産業の内部構造を理解し、記者という仕事を体験しました。

一宮支局で、人生初の取材を行いました。残暑がまだ厳しい9月でした。私は重い取材機材を持って、取材記者とともに現場に足を運び、短い時間内でできる限り多くの人とコミュニケーションし、情報を集めようとしていましたが、取材メモを取るだけで精一杯でした。その後、デスクの丁寧な指導のもと、人生最初の新聞原稿を書きました。仕上がった原稿を読んだ瞬間、その記者としての達成感が何よりでした。現場取材と原稿作成を通じて、限られた時間帯で迅速かつ確実に情報を伝えることの大変さ、記者という仕事の緊迫感がわかりました。

写真部で研修のとき、ちょうど不祥事件の取材依頼が入ったため、写真部の記者とともに秘密取材に行きました。密かに機材を持って、ドキドキしながら現場に入り込み、用心深く行動して、一気に何百枚の写真を撮って、任務を完成しました。記者という仕事はたまに危険も伴うと実感しました。

最後に体験したのは整理部の仕事です。現場で取材する記者と違い、整理部の記者はいつもデスクに向けて、取材記者の原稿の編集、見出しの作成、版面構成の編集を行います。整理部に入った初めての日、整理部の仕事が非常に地味で退屈だと思いました。しかし、整理部の記者たちがただ10文字の見出しでも、字句を練り、熟考を重ねて、何回も試行錯誤

を繰り返しました。中立の立場で客観報道を伝達する姿勢で、丁寧に一字一句原稿を推敲します。彼らの姿から仕事と社会への責任感について深く考えました。

忙しくて充実した10日間でした。私は中日新聞社でのインターンシップを通じて、本で学んだ日本のマスメディア報道における「客観・中立・公正」の姿勢を新聞社現場で体験することができました。高校時代、地元（中国）の新聞社で一日インターンシップの経験もあります。そのとき、自分の書いた原稿は編集長に最終検閲をされ、鋭い表現や言葉使いにいろいろ制限されたこともありました。当時に経験した新聞製作と比べ、日本の新聞社で初めて無検閲の新聞作りとは何かを知り、記者の表現の自由、そしてマスコミの公的機関への監視機能の重要性を痛感しました。

2011年大学院を卒業してから、名古屋を離れることになります。しかし、中日新聞社でのインターンシップ、またここで暮らした3年間半の歳月は一生忘れられない思い出になると思います。その経験と学んだ知識を将来の仕事でも活かしたいと思います。

この度、私は初めて首都圏外の大学の留学生として、編集委員を担当させていただきました。せっかくの機会ですので、ぜひ地域特色と文化を多くの方に紹介したいという気持ちで、名古屋特集のコラムを入れ、この記事を書かせていただきました。



初めて取った取材写真（愛知県一宮市の観光宣伝イベントの取材現場にて）



中日新聞夕刊の編集の最中で、緊張感が漂った本社整理部



新聞が仕上がる前の雛形

（担当：平成21年度電の子奨学生 名古屋大学 陳 悦）

寄付者の紹介

財団は、様々な立場の方々から、ご支援をいただいておりますが、特に寄付者の皆様からのご支援は、財団にとって心強い力となっています。前号に引き続き、普段なかなか交流の機会が少ない寄付者の皆様を、竜の子奨学生に知ってもらおうための企画です。今号では、吉田重久様と緑健児様のお二人に、お話を伺いました。



よしだ しげひさ
吉田 重久 様

日本和装ホールディングス株式会社
代表取締役社長

質問 財団にご寄付を頂く事になったきっかけを教えてください

秋元理事長とは友人の紹介で知り合いました。それがきっかけで、秋元理事長が創業された会社のホームページを拝見するようになり、そこで財団のことを知りました。理事長の私財を投じた財団の素晴らしい考え方に賛同し、今後の活動に少しでもお役に立てればと、寄付をさせていただくようになりました。

質問 竜の子奨学生に今後どのような事を期待したいですか

日本で学んだことを活かし、これからあらゆる分野で活躍して欲しいと思っています。そして将来、日本との架け橋になって欲しいと期待しています。

質問 最後に、竜の子奨学生へのメッセージを一言

皆さんの心の中に親しい国の1つとして「日本」を刻んで欲しいと思っています。留学期間中に、日本の生活や文化、習慣、伝統とさまざまなことを見たり聞いたりしたと思いますが、ここ20年ほどは本来の日本らしくないところも見受けられます。その事に真剣に気づき始めた日本人も多くなっています。
“歴史は繰り返す”という言葉の通り、あの戦後の素晴らしい発展を遂げた時期を再び迎えると信じており、その時に皆さんが、日本との架け橋になって欲しいと願っています。



みどり けんじ
緑 健児 様

新極真会
代表

質問 財団にご寄付を頂く事になったきっかけを教えてください

秋元理事長と理事長の奨学生に対する熱い思い、思いやりに共感し寄付させていただきました。

質問 交流会にご参加いただいたご感想を聞かせてください

新極真会の総本部道場で空手のセミナーを行いました。みんなの目が輝いていました。初めて空手を体験した方がほとんどでしたが、一生懸命頑張り、日本の文化を吸収しようとする姿にとっても感動いたしました。

質問 竜の子奨学生に今後どのような事を期待したいですか

今後みなさんは日本や故国に戻って活躍されると思いますが、是非とも秋元理事長や財団からもらった優しさや思いやりを忘れずに、もっと勉強努力して、様々な分野で活躍し日本との架け橋になってください。

質問 最後に、竜の子奨学生へのメッセージを一言

竜の子奨学生同士、絆を深めて一生の友であってほしいと思います。ともに助け合い支え合って、世界へ羽ばたいてください。

ご寄付いただいた皆さまへ

ご寄付いただいた皆様に奨学生全員を代表して心からお礼の言葉を申し上げます。竜の子奨学生たちが無事に卒業でき社会へ進出できたことや優秀な成績で進学できたことは、奨学生の後ろで皆様が見守ってくださったからです。また、秋元国際奨学財団にとって初めてのOB会が開かれたのも皆様の持続的な関心があったからだと思えます。残っている奨学生たちもいつかは社会へ進出し、日本や自分の母国で、もしくは世界で、今よりもっと大きく成長していくかもしれません。その可能性を信じ、応援してくださった皆様のご期待を裏切ることなく、自分を含む竜の子奨学生たちは前へ前へと進みたいと思います。

(平成21年度竜の子奨学生 東京外国語大学3年 崔 ミン)

委員長 東京外国語大学 桂 ミン

奨学生としてももう2年目の最後になりました。今までは財団から様々な方々に助けられました。会報「竜の子奨学生」が完成し、やっと一息返しができた気持ちです。そして、一緒に頑張ってくれた他の編集委員の方々のご協力があったからこそ、会報が無事に出来上がったと思います。ありがとうございました。今回の編集では「懇親会&OB会」(と「第14回交流会レポート」の一部)を担当しました。自分が編集後、一番後悔していることは、締切りをちゃんと守れなかったことです。今度また、このような経験をする機会があれば、とりあえず、なんでも前倒しという考えを持って臨みたいと思います。本当に良い経験になりました。皆様、ありがとうございました。

副委員長 慶應義塾大学 李 昌昱

私は、今回の竜の子奨学生会誌において、「第14回交流会の空手体験」を担当させていただきました。記事を書きながら、自分が空手を直接経験しながら感じたことを何度も思い出しながら、また、交流会の映像も何回も繰り返し見ながら記事を書いていきました。会誌の記事を書いていく途中で、徴兵の問題で一時的に母国へ帰国しなければならない状況になってしまっ、編集委員のみなさんにご迷惑をおかけすることとなって申し訳ない気持ちでいっぱいでした。今回の竜の子奨学生会誌の編集委員として参加したことを大変嬉しく思っています。これからもこの貴重な経験を忘れず、活かして頑張りたいと思っています。

委員 名古屋大学大学院 陳 悦

この度、私は初めて首都圏外の大学に在籍している留学生として、会報「竜の子奨学生」第7号の編集と担当させていただきました。ちょうど卒業論文の作成時期と重なったため、東京に行くことが難しかったです。編集委員の皆さんのご協力とサポートで、SKYPEでの電話会議を通じて、名古屋にいらぬ編集委員会に参加することができました。今回の会報編集を通じて、コミュニケーション能力と日本語の表現力を向上させるだけでなく、仲間同士と助け合い、作品を仕上げることの楽しさを味わうこともできて、本当に素晴らしい経験でした。この体験は私にとって一生忘れられない思い出になるでしょう。皆さん、本当にありがとうございました。

委員 東京工業大学 李 慧芳

会報「竜の子奨学生」第7号の編集委員を任せられ、ありがとうございました。学会が多い年末の時期に、素人の私は大丈夫かなあと心配しながら第13回の大阪交流会の分を担当させていただきました。編集委員の皆さんと打ち合わせして、順調に担当の分を完成することができました。ここで、お礼を申し上げます。編集をしながら大阪交流会の写真集のみなさんの笑顔を見たら、その時の楽しさを思い出して、思わず笑ってしまい、心が温かい気持ちで溢れました。

すごく満足しています。今回の仕事は本当に貴重な経験でした。

委員 日本大学 劉 榮

第7号「竜の子奨学生」会報の「近況報告」をやらせて頂きまして、本当にありがとうございました。まず奨学生の皆さんに感謝します。編集のため、皆さんとメールやら、電話やらのやりとりをしなければなりませんので、その間奨学生の皆さんから素早くご返信いただきました、そのお陰で編集は無事完成しました。それより、最も大事な事があると感じました。それは、普段交流会以外なかなか会えない奨学生の皆さんとの距離が縮まって、もっと親密感のある関係となりました。今回会報編集のきっかけで編集委員をはじめ、他の奨学生の皆さんとも仲良くなりまして、本当に良かったです。

また、皆さんの報告を見て、刺激されたり、励まされたりします。これからもそれぞれの専門分野でお互い支えながら、皆仲良く頑張りたいと思います。



Topics

ラオスの子供たちに図書セットを寄贈

「子どもたちの豊かな想像力と思考力を育むためにラオスの子どもたちに図書セットを届ける」という一般財団法人国際センターのプロジェクトに賛同し、2010年9月、PaLay 小学校に本を寄贈いたしました。

本を読んだ子供たちには、広い視野と夢を持って、未来の竜の子奨学生になって欲しいと思います。



Akimoto Tatsunoko International Scholarship Foundation

財団法人 秋元国際奨学財団
<http://www.tatsunoko.jp>

